

# 正しい言葉 (*śabda-*)

—ヴェーダとパーニニ文法学の観点から—

尾 園 絢 一

本稿は印度学宗教学会第56回学術大会の課題研究「宗教における言葉・音声」に際して発表した内容を基にしている。

## 0. はじめに

ヴェーダ祭式は宇宙の理法 (*ṛtá-* 「はまっている」) に基づき、実現力を持つ言葉 (*brāhmaṇ-*) を用いて、自然や神々を操作する営みである。祭式のメカニズムを正しく理解し、正しく言葉を運用することができるのが祭官である。古代インドの人々にとって言葉の力とは超自然的なものではなく、緻密に計算されたものであった。

「緻密に計算された」という点で、古代インドにおける言葉は、コンピュータの操作に譬えることができるかもしれない。コンピュータのプログラムは正しい情報を送信しなければ、正しく作動しない。一般の人でも操作可能なように設定されているとはいえ、根本的な部分は、メカニズムに習熟した人、専門の技術者に頼らざるを得ない。また高度な知識を備えた者であれば、ハッキングや遠隔操作のような悪用も可能であろう。

言葉もまた、これと同じように、古代インドにおいては正しく発せられなければ、有効に機能せず、災いをもたらすことにもなりかねないと考えられていた。言葉の力が有効に作用するかどうかを決定するのはアウトプット、即ち、*śabda-* m. 「音声、発語形 (speech form)」である<sup>1</sup>。インド伝統文法学において

1 Cf. 『マハーバーシャ』 vol.I, p.1, line 10ff.: *yenoccūritena sāmālāṅgūla- kakudakhuraviṣaṇam saṃpratyayo bhavati sa śabdaḥ // atha vā pratītapadārthako loke dhvaniḥ śabda ity ucyate / tad yuthā / śabdaṃ kuru / mā śabdaṃ kārṣiḥ / śabdakāryaṃ māṇavaka iti / dhvaniṃ kuruvanṃ evaṃ ucyate / tasmād dhvaniḥ* 「発せられることにより、のど袋、尾、背のこぶ、蹄、角 [といったもの] の観念 (又は共通理解) が生じるところのもの、それが語である。だがむしろ、世間では語の意味が理解される音声語であると言われ

*śabda*-「発語形」とは、同時に「正しく発せられた語 (= *sādhū-śabda*-)」(↔ *apa-śabda*-「誤って発せられた語」) のことでもある。言葉を正しく用い、効果を発揮するために、専門知識を備えた者が必要とされたのである。

パーニニ文法学の大成者パタンジャリ『マハーバーシャ (*Mahābhāṣya* 「大注解」)』には言語に関する理論や考察が多く含まれており、古代インド人の言語観を考察する上で貴重な資料となる。本稿は同書序文 (*Paspaśāhnika*) に説かれる文法学の意義に焦点を当てる。この部分は後のバラモン哲学諸学派の中でも注目され、これまで様々な観点から研究、紹介されてきた。本稿ではヴェーダに説かれる言葉の力の観念がパーニニ文法学の中で、どのような形で残り、どのように展開するかを考察する。

## 1. ヴェーダにおける「正しい言葉」

### 1.1. リグヴェーダ (RV)

『リグヴェーダ』(紀元前1200年頃)には、敵対する異部族を、*mṛdhrá-vāc*-「無気力(いいかげん)な言葉の者」、*an-ās*-「口を持たぬ者」、つまり「正しい言葉を話す口を持たぬ者」、*vī-vāc*-「乱れた言葉の者」と蔑んでいる (SAKAMOTO-GOTÔ 2005 : 188)。E.g. RV V 29, 10cd: *anāso dāsyūmr amṛṇo vadhēna | nī duryonā āvṛṇaṇ mṛdhrāvācaḥ* 「君(インドラ)は口を持たないダスユたちを武器によってたたきつぶした。悪い居場所(墓)へといいかげんな言葉の者たちをねじ込んだ」。RV X 23, 5ab : *yó vācā vívāco mṛdhrāvācaḥ | purū sahāsrāśivā jaghāna* 「言葉によって、乱れた言葉の、いいかげんな言葉の、好意的でない幾千たち(敵)を打ち殺した者(インドラ)」。

これらの歌の背景には正確に発語された言葉は神々を動かし、勝利をもたらすが、不正確な言葉は効力を持たないという観念がある (SAKAMOTO-GOTÔ op.cit.)。

また RV X 71, 2では正しい言葉を話すことが仲間たる証であることが歌われている (→3.2.7.)。

---

ている。例えば、「語を発せよ」、「語を発するな」、「この男の子は[常に]語を発する(よくしゃべる)」などと。音声を発するとこのように言われる。それ故、音声は「語であると言われている」。

## 1.2. ブラーフマナ神話に見られる言葉

ブラーフマナ文献には言葉は正しく発しなかった結果、有効に機能しない、又は災いをもたらしたという神話が伝えられる。以下の2つの神話は文法学者パタンジャリ『マハーバーシャ』において言及されていることで知られている。

1.2.1. *indraśatru-*の発語

トゥヴァシュトゥリは息子ヴァイシュヴァルーパーがインドラに殺されたことを怒り、ソーマの喫飲から除外した。除外されたインドラは招かれずに勝手にソーマを飲み干した。それを怒ったトゥヴァシュトゥリはインドラを殺そうとしてインドラの敵 (*indra-śatru-*) を生じさせようとしたが, *indra-śatru-* の語のアクセント位置を誤ったため、インドラを天敵とする (*īndra-śatru-*), ヴリトラ (*vṛtra-* 「障害」, 魔物の名) が生じてしまい、インドラを殺すことができなかったという話がブラーフマナ文献群に伝わっている<sup>2</sup> :

『シャタパタ・ブラーフマナ』 (ŚBM I 6, 3, 8)

*sá tváṣṭā cukrodha / kuvīn mé 'nupahūtaḥ sómam ababhakṣad īti. sá svayám eva  
yajñaveśasám cakre. sá yó droṇakalaśé śukráḥ páriśiṣṭa āsa tám pravartayām  
cakāréndraśatrur vardhasvéti. sò 'gním eva prāpya sámbabhūvāntáraivā  
sámbabhūvéty u háika āhuḥ. sò 'gnīśómān evābhisámbabhūva sárvā vidyāḥ  
sárvam yáśaḥ sárvam annādyaṁ sárvām śrīm // 8 // sá yád vārtamānaḥ  
samābhavat / tásmād vṛtró 'tha yád apāt samābhavat tásmād áhiṁs tám dānuś ca  
danāyúś ca mātēva ca pītēva ca párijagṛhatus tásmād dānavā īti āhuḥ // 9 // átha  
yád ábravīd índraśatrur vardhasvéti / tásmād u hainam índra eva jaghānātha yád  
dha śásvad ávakṣyad índrasya śátrur vardhasvéti śásvad u ha sá evéndram  
ahaniṣyat // 10 //*

「トゥヴァシュトゥリは怒った、“私によって呼び寄せられていない者がソーマを享受したというわけか?”。彼は自ら祭式への侵入を為した。彼は木の桶の周りに残された白い[ソーマ], それを前に転がした(火の中に献じた), “インドラを敵とする者が成長せよ”と[言って]。彼(ソーマ)は火へと達して, [インドラを敵とする者に] なった。他方 “[火へと達するまでの] 間になった” とある者たちは言っている。彼はまさにアグニとソー

2 Cf. 『ジャイミニヤ・ブラーフマナ』 II 153-157 etc., 辻1978: 59-64

マを手に入れ、全ての知識、全ての名声、全ての食物、全ての立派さを〔手に入れた〕[8]。彼は回転 (vṛt) しながら発生したので、それ故ヴリトラ (Vṛtra) [と呼ばれる]、それから、足を持たずに発生したので、それ故、蛇 [と呼ばれる] 』と人々は言っている。彼をダヌとダナーユ-とが母と父のようにぐるりと捕まえた。それ故、ダヌの子 [と呼ばれる] と人々は言っている [9]。それから“インドラを敵とする者が成長せよ”と言ったので、それ故、インドラは当人 (ヴリトラ) を打ち殺した。〔献供後〕続けざまに、“インドラの敵が成長せよ”と言っていたら、彼 (ヴリトラ) こそがインドラを続けざまに打ち殺したであろう [10]。]

### 1. 2. 2. 言葉を取られたアスラたち

神々はアスラのものであった、女である言葉 (ヴァーチ *vác-* f., アヴェスタ語 *vāxš*, ラテン語 *vōx*) を横取りした。横取りされたアスラたちは、正しい発語 (*vácas-*, アヴェスタ語 *vacah-*, ギリシア語 *ἔπος*) ができなくなり, 「ヘーラヴォー, ヘーラヴァハ (*he lavo he lavaḥ*)」と発して滅び去ってしまったという話が『シャタパタ・ブラーフマナ』に出て来る。アスラが発した *he 'lavo he 'lavaḥ* (カーンヴァ本 *hailó hailáḥ*) は *he 'rayo he 'rayaḥ* 「うわー, 敵だ! うわー, 敵だ!」の方言形と考えられる (GOTÖ 1987 : 252)。方言が混じった野蛮な言葉 (*mleccha-*) はアスラが話すものなのでパラモンは話すべきではないと語られている :

『シャタパタ・ブラーフマナ (ŚBM III 2, 1, 23 ~ ŚBK IV 2, 17-18)』

*tām devāḥ / ásurebhyo 'ntarāyaṃs. tām svikṛtyāgnān eva parigrhya sarvahútam  
ajuhavur. áhutir hí devánām. sá yām evāmūm anuṣṭúbhājuhavus tād evainām  
té devāḥ svy ákurvata. té 'surā áttavacaso hé 'lavo hé 'lava íti vādantaḥ  
pārābabhūvuh // 23 // táttraitām ápi vácam ūduḥ / upjijñāsyām. sá mlecchás.  
tásmān ná brāhmaṇó mlecched. asuryā haiṣ ávág.*

「神々がアスラたちから彼女 (*vác-* 「言葉」) を横取りした。彼女を自分のものにして、まさしく祭火の所で完全に捕らえ、全て (全身) を献ずる (*sarva-hút-*, cf. ギリシア語 (聖書) *ὁλοκαύτωμα* 「丸焼きにして捧げること (holocaust)」<sup>3)</sup> ものとして献供した。というも [彼女は] 神々の献供であるから。そうして、彼らがあの女をアヌシュトゥ

ブ(8音節×4の韻律)を用いて献供した時、まさしくその時、当の女をその神々は自分のものにした。彼らアスラたちは禿語〔機能〕を取り上げられて、“*he 'lavah, he 'lavah*”と口にして、減び去ってしまった[23]。その際、こうした、詮索されるべき(意味が分かりにくい)言葉をも彼らは口にした。それ(言葉)<sup>4</sup>は野蛮な言葉(*mleccha*)〔と呼ばれる〕。それ故、バラモンは野蛮な言葉を話すべきではない。こうした言葉はアスラのものである。』

## 2. パーニニ文法学の時代的および地理的背景

正しく言葉を発することを身につけ、ヴェーダを護持するという専門性の高い職務は文法学(*vyākaraṇa*-)、語源学(*nirukta*-)、音声学(*prātiśākhya*-, *sikṣā*-)などの諸学問の成立を促した。文法学の歴史はパーニニ(Pāṇini)のストラ(*Aṣṭādhyāyī*「八課(*The Eight Lessons*)」)<sup>5</sup>)をもって始まる。パーニニの年代は一般に紀元前4世紀とされ、北西インドのŚālātura(現Lahore, Attock近辺<sup>6</sup>)出身(*śālāturīya*-)と伝えられる<sup>7</sup>。ガンダーラ地方がアケネメス朝ペルシアの総督領(*satrapy*)であった時代の人物ということになる。

パーニニが目的としたのは第一義的には、当時の教養人たちが話すべき、正しい言葉を教えることであった。また *chandasi*「ヴェーダ語では」<sup>8</sup>という文言の下、ヴェーダ(特にリグヴェーダ、黒ヤジュルヴェーダの言語)に用いられる、語形・語法をも細かく教えるが、それらは既に古風な表現となっており、当時の標準ではなかった。さらにパーニニは祭式行為の際に唱える語句についても定めている。語句の高低アクセントのつけ方(Pāṇ. I 2, 34-38)や延長母音(*pluti*)の使用法(Pāṇ. VIII 2, 88-92, cf. KOBAYASHI 2006:13-15)、アドヴァリュ祭官による指示(Pāṇ. II 3, 61, cf. OZONO 2010:242ff.)の文言などに関する細かい規定がある。これらは恐らくは当時の祭式行為の語法を記録したもの

4 名詞同置文で主語となる代名詞の性・数は述語の名詞に一致(*concord*, *Kongruenz*)するため、*vāc*-f.を指す代名詞が男性となっている(GOTO 1987:252, fn.569.)。

5 パーニニ文法学においては、集合を表示する(Pāṇ. II 1,51)数詞限定複合語(*dvigu*-, Pāṇ. II 1,52)を作る suffix -i-をつけたもの(*aṣṭa-adhyāya*- > *aṣṭa-adhyāy-i*)と説明される(Pāṇ. IV 1,21)。

6 玄奘『大唐西域記』(卷二健駄邏國, 大正51, 881c)によれば、烏鐸迦漢荼(Attock)から西北に20余里。当時もパーニニの生地として知られていたようである。

7 SCHARFE 1977:88, fn.4.

8 Cf. THIEME 1935:68f, OZONO 2010:251.

であり、シュラウターストラ（ヴェーダ祭式綱要書）の規定と重なるものもある。こうした点や言語的特徴から、パーニニが標準とする言語はヴェーダ語から古典サンスクリットへの過渡期の言語（Post-Vedic）に位置づけられる。

ブラーフマナから古ウパニシャッドの時代にアーリヤ諸部族が移住をさらに進めた結果、バラモン文化は北インドの広範囲、いわゆる Madhyadeśa 「中央の地」<sup>9</sup>と呼ばれる辺りにまで拡大した。アーリヤ人の活動地域としては、いわゆる Āryāvarta 「アーリヤ人の密集地」<sup>10</sup> (āvarta- 「[人や物が] 渦巻く所」)) の名が知られている<sup>11</sup>。パタンジャリは教養人 (śiṣṭa-) とは Āryāvarta の人々であるとし<sup>12</sup>、彼らが使う語に権威 (pramāṇa-) を与えている。パタンジャリ自身に関する記録は伝わっていないが、『マハーバーシャ』の中に出て来る、王名 Puṣyamitra が Śuṅga 朝の建国者に比定され、またギリシア人 (yavana-, cf. Ἰωνες 「イオニアの人々」) が Sāketa (Ayodhyā), Madhyamikā (Chittor) を包囲したという有名な一節が、一般にメナンドロス（ミリンダ）王の侵入に比定されることなどに基づいて、紀元前150年前後と推定されることが多い。パタンジャリの生地は、断片的記述の解釈を巡って議論されてきたが、近年の

9 『マヌ法典 (Manu-Smṛti)』II 19によれば、南北は Himālya と Vindhya 山脈に挟まれ、西はサラスヴァティー河が消える地点 (vinaśana-)、東は Prayāga (現 Allahabad) までの地域。

10 PW I p. 698. 或いは「戻ってくる (ā-√vart) 場所」とも解し得る。

11 南北は Himavat と Vindhya (或いは Pāriyātra) 両山脈、東西は Ādarśa 「[サラスヴァティー河が] 現れる地点」と Kālakavana 「黒い森」に囲まれた地域。Cf. Pat. ad II 4,10, vol.1, p.475, line 3: *kaḥ punar āryāvartaḥ / prāg ādarśāt pratyank kālakavanād dakṣiṇena himavantam uttarena pāriyātram* 「だが Āryāvarta とは何か。Ādarśa から東、Kālakavana から西、Himavat より南、Pāriyātra より北である」。BaudhDhS I 1,1,29, Vāsiṣṭha-DhS I 8-10などの法典の記述とほぼ一致する (cf. BRUCKER 1980: 94f.)。『マヌ法典』(Manu-Smṛti II 22-23) では Himavat と Vindhya の両山脈の間の全域まで拡大している。

12 Pat. ad VI 3,109, vol.3, p.174, line 10ff. (Cf. CARDONA 1997: 552): *evaṃ tarhi nivāsata ācārataḥ / sa cācāra āryāvarta eva...etasminn āryanivāse ye brāhmaṇāḥ kumbhīdhānyāḥ alolupā aśṛghyamāṇakāraṇāḥ kiṃ cid antareṇa kasyās cid vidyāyāḥ pāragās tatrabhvantaḥ śiṣṭāḥ* 「そうだとしたら、それなら定住地と振る舞いに基づいて [教養人 (śiṣṭa-) たちと見なされるべきである]。そして、そのような振る舞いはアーリヤヴァルタだけにある…このアーリヤ人の定住地にいて、バラモンとして、壺 [に入るだけの] 穀物を持ち、貪欲でなく、[正しい振る舞いを実践するのに] 理由を掲げず、何も [特別な教えを受けることが] なくても、何らかの学識を究めている、そういう方々が教養人である」。

研究によれば, Mathurā (インド北部ヤムナー河畔) 近辺ではなかったかと推測される<sup>13</sup>。また彼はデカン地方に住む人々 (dākṣiṇātya-) の言語的特徴にも通じていたことが窺える<sup>14</sup>。

### 3. 文法学の目的: 『マハーバーシャ』の第一日課 (Paspasāhnikā)<sup>15</sup>

3.0. パーニニのストトラはカーチャーヤナ『ヴァールツェティカ』によって当時の実情に合わせて補正された。『ヴァールツェティカ』による補正はパタンジャリ『マハーバーシャ』の中で吟味され、文法学の体系が確立した。『マハーバーシャ』の序文の中で文法学を学ぶ動機が説かれており、18の動機が挙げられている。その中、最初の5つはヴェーダの護持に関するものである(ヴェーダの護持, マントラの改変, 学習の伝統, ヴェーダ学習の効率化, ヴェーダ解釈をめぐる疑いを解消するため)。

#### 3.1. ヴェーダ護持の目的 (抜粋)

##### 3.1.1. ヴェーダの護持のため

『マハーバーシャ』 vol. I, p.1, line 15ff.

*rakṣārthaṃ vedānām adhyeṣaṃ vyākaraṇam / lopāgamavarṇavikāraṇaḥ hi samyag vedān paripālayiṣyati*

「諸ヴェーダの護持のために文法学は学ばれるべきである。何故ならば、[音の] 消失, 付加, 音の変化を解する者は正しく諸ヴェーダを護持することになるから。」

##### 3.1.2. マントラの改変 (ūha) のため

『マハーバーシャ』 vol. I, p.1, line 16ff.

*ūhaḥ khalv api / <sup>†</sup>na sarvair liṅgair na ca sarvābhīr vibhaktibhīr vede mantrā*

13 SCHARFE 1976 : 274.

14 Pat. vol. I, p.8, line 8f.: *priyataddhitā dakṣiṇātyā yathā loke vede ceti yathā laukikeṣu vaidikeṣu iti prayuñjate* 「[Vārt. *yathā laukikeṣu vaidikeṣu* について。] 南 (デカン地方) にいる人々は *taddhita* [接辞の使用を] 好み, *yathā loke vede ca* “世間とヴェーダで” と [言わずに] *yathā laukikeṣu vaidikeṣu* “世間的 [語法] とヴェーダ的 [語法] で” というように使う」

15 翻訳は FILLIOZAT 1975, JOSHI-ROODBERGEN 1986等, 解説は CARDONA 1997 : 543-556, またミーマーンサー学派 (クマールラ) の解釈については針貝2015がある。

*nigaditāḥ / te cāvaśyaṃ yajñagatena yathāyatham vipariṇāmayitavyāḥ / tān  
nāvaiyākaraṇaḥ śaknoti yathāyatham vipariṇāmayitum*

「[マントラの]改変もまた然り。全ての文法的性と共に、また全ての格語尾を伴って、ヴェーダの中にマントラが採録されているのではない。それらは、必然的に祭式に携わる人によって適宜改変されるべきである。それらを文法学者でない者は適宜改変することはできない。」

*ūha-* (*ūhati* 「ずらす」 < \**uú-ug<sup>h</sup>-elo-*) とは祭式の基本型 (Prakṛti) において使用されるマントラの文言を祭式の変化型 (Vikṛti) において改変して用いること<sup>16</sup>。変形祭式に適合するようにマントラ中の語、或いは語の数、人称などを改変して唱える<sup>17</sup>。但し、改変によって韻律が壊れてしまう恐れがある讃歌 (*īc-*) には改変は起こらないとされる<sup>18</sup>。

### 3.1.3. ヴェーダの解釈に疑う余地を残さないようにするため

『マハーバーシャ』 vol. I, p.1, line 22ff.

*asaṃdehārtham cādhyeṣyaṃ vyākaraṇam / yājñikāḥ paṭhanti / sthūlāpṛṣatīm  
āgnivāruṇīm anaḍvahīm ālabheteti / tasyām saṃdehaḥ sthūlā cāsau pṛṣatī ca  
sthūlapṛṣatī sthūlāni pṛṣanti yasyāḥ sā sthūlāpṛṣatīti / tāṃ nāvaiyākaraṇaḥ  
svārato 'dhyavasyati / yadi pūrvapadaprakṛtisvaratvaṃ tato bahuvrīhiḥ /  
athāntodāttatvaṃ tatas tatpuruṣa iti*

「[ヴェーダの解釈について] 疑いを起こさせないために文法学は学ばれるべきである。祭式学者たちは説く、「アグニとヴァルナ [に捧げる] 荷車を動かす巨大な斑点の牝牛を捕まえるべきである<sup>19</sup>」。その [牝牛] について疑いが [生じる]：例の牝牛は巨大で、かつ

16 E.g. 『シャーンカーヤナ・シュラウタースートラ (ŚāṅkhŚrSū VI 1,3)』: *yathārtham uttarasyām tatāv arthavikāraṣyotpattirūpeṇānabhidhānāc chabdhavikāram ūhaṃ bruvate* 「目的に応じて、後 [に定められる] 祭式 (= *vikṛti-*) においては、原型 (*utpatti-* = *prakṛti-*) に見られる [マントラの] 形によっては目的の変化が表示されないので、語形を変えること即ち *ūha* を人々は唱える」]

17 Cf. ŚāṅkhŚrSū VI 1,5.

18 ĀśvŚrSū V 4,8: *vijñāyate pūyati vā etad ṛco 'kṣaraṃ yad enad ūhati tasmād nohet* 「[以下のことがヴェーダにおいて] 知られている：それによって詩節 (*ṛc*) の音節が腐るのだ、当のもの (音節) を変えると。だから変えるべきではない」]

19 Cf. KS XIII 6<sup>m</sup>: 186,22 *āgnivāruṇīm anaḍvahīm ālabheta*



斑の, *sthūlapṛṣatī* なのか, 大きな斑点たち (n.pl.) を持つ, 彼女 (牝牛), つまり *sthūlapṛṣatī* なのか。文法学者でない者はその牝牛をアクセントから確定できない: もし前分の語の本来の位置 (*prakṛti-*) にアクセントがあるならば, それに基づいて, 所有複合語 (*bahuvrīhi*) であり<sup>20</sup>, だが最終音節にアクセントがあるならば, それに基づいて, 限定複合語 (*tatpuruṣa*) である<sup>21</sup>]

サンヒターを始めとする, 主要なヴェーダ文献はアクセントが伝承されている。複合語の場合はアクセント位置によって, 複合語の種類が変り, それに従って意味も変わる。1. 2. 1. の *indra-śatur-* の発語の神話のように, 間違ったアクセントをもって発すると, それに従って間違った結果が発生することになる。

### 3. 2. その他の目的

3. 2. 0. 文法学を学ぶ意義はヴェーダの護持や伝承のためだけではない。文法学を学ぶことは, バラモンとして, また祭官という職業を全うする上で, 必要不可欠であり, しかも, 功德や様々な能力を身に着けることにもなると説く。ヴェーダの護持以外の目的として13を挙げる。その中の幾つかを以下に紹介する。

#### 3. 2. 1. バラモンは正しくない語を発してはならないから

『マハーパーシャ』 vol. I, p.2, line 7ff.

*te 'surā halayo halaya iti karvantaḥ parābabhuvuḥ / tasmād brāhmaṇena na mlecchitavai nāpabhāṣitavai / mleccho ha vā eṣa yad apaśabdaḥ / mlecchā mā bhūmety adhyeṣaṃ vyākaraṇam*

「そのアスラたちは “*he 'lavah, he 'lavah*” と声を発して, 滅び去ってしまった。それ故, バラモンは野蛮な言葉 (*mleccha-*) を話すべきではないし, [正しい言葉から] 外れて話すべきではない。野蛮な言葉とは誤った言葉であるところのものなのだ。我々は野蛮な言葉を話す者とはなってはならない [と考えて], 文法学が学ばれるべきである」

20 Pāṇ. VI 2,1 *bahuvrīhau prakṛtyā pūrvapadam* 「所有複合語においては前の語 [のアクセント位置] は本来のまま (単独の語の場合と同じ) である。」

21 Pāṇ. VI 1,213 *samāsasya [antaḥ 220, udāttaḥ 159]* 「複合語の最終音節は高アクセント (*udātta-*) である」

当然これは1. 2. 2. で紹介した『シャタパタ・ブラーフマナ (ŚBM III 2, 1, 23～ŚBK IV 2, 17-18)』の神話を念頭に置いている。前述のようにアスラが発した *he 'lavo he 'lavaḥ* は *he 'ṛyo he 'rayaḥ* 「うわー、敵だ！うわー、敵だ！」の方言形であり、そうした言葉をバラモンは話してはならないと説く。

### 3. 2. 2. 誤った語を唱えると唱えた者を傷つけるから

『マハーバーシャ』 vol. I, p.2, line 10ff.

<i>duṣṭaḥ śabdaḥ svarato varṇato vā</i>	アクセント又は音素に照らして損なわれた語が
<i>mithyā prayukto na tam artham āha /</i>	誤って使用されると、その意味を言い表さない。
<i>sa vāgvajro yajamānaṃ hinasti</i>	それは言葉のヴァジュラとなって祭主を傷つける。
<i>yathendraśatruḥ svarato 'parādhāt //</i> <sup>22</sup>	<i>indraśatru-</i> [という語] がアクセントに照らして しくじっているから [祭主を傷つける] ように。

この詩節は『パーニニーヤ・シクシャー (Pāṇiniya-Śikṣā)』52に由来するものと考えられる。シクシャーでは、*duṣṭaḥ śabdaḥ* の代わりに *mantra hīnaḥ* 「[アクセント又は音素に照らして] しくじたマントラ」となっている。1. 2. 1. で紹介した、*indra-śatur* の発語にまつわる神話を指している。

22 Cf. Pāṇiniya-Śikṣā 52, JOSHI-ROODBERGEN 1986 : 39, fn. 109.

### 3. 2. 3. 正しい語を用いる者には *dharma-* が生じ、正しくない語を用いる者には *adharma-* が生じるから

『マハーバーシャ』 vol. I, p.2, line 19ff.

<i>yas tu prayuṅkte kuśalo viśeṣe</i>	だが違い（適切な使い分け）に精通し、
<i>śabdān yathāvad vyavahārakāle /</i>	〔言葉の〕やりとりに際して適切に語を用いる者、
<i>so 'nantam āpnoti jayaṃ paratra</i>	その者は、言葉の〔正しい〕使用 <sup>24</sup> を知る者と
<i>vāgyogavid duṣyati cāpaśabdaiḥ //</i> <sup>23</sup>	してあの世において無限の勝利を獲得する。
	他方、〔言葉の正しい使用を知らない者は〕誤った語〔の使用〕によって疵つく。

【問】 *kaḥ* 「誰が〔疵つくのか〕？」

【答】 *vāgyogavid eva* 「他ならぬ言葉の〔正しい〕使用を知る者が」

【問】 *kuta etat* 「これは何故か？」

【答 1】 *yo hi śabdān jānāty apaśabdān apy asau jānāti / yathaiva hi śabdajñāne dharma eva evam apaśabdajñāne 'py adharmah* 「何故なら、諸々の〔正しい〕語を解する者、そういう者は誤った語も解するから。というのも〔正しい〕語を認識すると正しい行い (*dharma-*) が生じるように、同様に誤った語を認識すると正しくない行い (*adharma-*) が〔生じる〕から。」

【答 2】 *atha vā bhūyān adharmah prāpnoti / bhūyāṃso 'paśabdā alpīyāṃsaḥ śabdāḥ / ekaikasya hi śabdasya bahavo 'pabhraṃśāḥ / tad yathā / gaur ity asya śabdasya gāvī goṇī gotā gopotalikety evamādayo 'pabhraṃśāḥ* 「いや寧ろ、より多くの不正が結果する。誤った語たちはより多く、〔正しい〕語たちはより少ない。一つ一つの〔正しい〕語に対して多くの〔正しい語から〕逸脱した語がある。例えば、*gauḥ* 「牛」というこの〔正しい〕語に対して、*gāvī, goṇī, gotā, gopotalikā* とこのようなものなどが逸脱した語たちである。」

【問】 *atha yo 'vāgyogavit* 「それでは、言葉の〔正しい〕使用を知らない者は？」

【答】 *ajñānaṃ tasya śaraṇam* 「その者には〔誤った語を使用していることを〕認識していないという避難所（逃げ場）がある。」

23 この詩節の起源は不明。

24 Cf. ナーゲーシャは *vāgyogavid-* を「言葉のつながり（語の構造、分析的理解）を知る者」と解する：*prakṛtipratya yavibhāgenārthaviśeṣaparatvaṃ tad vetūti* 「〔*vāgyogavid* とは〕語基と接辞の分割によって特定の意味が上位に來ること、それを知っている〔者〕ということである。」

【反論】 *nātyantāyājñānaṃ śaraṇaṃ bhavitum arhati / yo hy ajānān vai brāhmaṇaṃ hanyāt surāṃ vā pibet so 'pi manye patitaḥ syāt* 「認識していないことは度を越えたことに対しては避難所（逃げ場）とはなり得ない。何故なら認識せずにバラモンを殺すことがあれば、又はスラー酒を飲むことがあれば、その者も私が思うに〔地獄に、又は自分が属する階級から〕落ちた者（→ fn.29）となり得るから。」

【問】 *evaṃ tarhi so 'nantam āpnoti jayaṃ paratra vāgyogavid duṣyati cāpaśabdaiḥ/ kaḥ* 「そうだとしたら、それなら、“彼は言葉の〔正しい〕使用を知り、あの世で無限の勝利を手に入れるが、他方、誤った語によって疵つく”[とされているが]、誰が〔疵つくのか〕？」

【答】 *avāgyogavid eva* 「他ならぬ言葉の〔正しい〕使用を知らない者が」

【問】 *atha yo vāgyogavit* 「それでは、言葉の〔正しい〕使用を知る者は？」

【答】 *viñānaṃ tasya śaraṇaṃ* 「その者には〔正しい語と正しくない語とを〕見分けるといふ避難所（逃げ場）がある。」

上の出典不明の詩節では、正しい語の使用を知る人は、あの世で勝利を得ると言われている。正しい語の使用の効力が現世ではなく、来世に得られると説いていることが注目される。行為の効力が来世において決定するという考えは「業」（*kārman-*）の理論に通じる。業の理論の起源は *iṣṭā-pūrtā-* 「祭式と布施の効力」の理論に遡る<sup>25</sup>。

パタンジャリは正しい語の使用によって人にあの世で勝利を得させる力を *dharma-* 「正しい行い」であると考えた。Vārt. 1-2によれば、日常的な語法に基づいて語形と意味との対応が確立しているので、正しい語も誤った語も同じ意味を表すことができるが、*dharma-* 「正しい行い」[に基づく功德を得る]ためには文法学によって語の使用が規制されねばならない<sup>26</sup>。また Vārt. 9によれば、文法学に基づいて語が使用されると、繁栄（*abhyudaya-*）を得ることができる。このような *dharma-* をミーマーンサー学者は宗教的善果、功德と理解した。いわゆる「不可見力（*adṛṣṭa-*）」、「新得力（*apūrva-*）」と同義であるとされる（針貝2015：28f.）。

また『マハーバーラタ』XII 73, 20では、王が有徳の行為（*dharma-*）の果報を保護する代わりに、その4分の1を税として徴収することが言われている（阪

25 *iṣṭā-pūrtā-* および五火二道説の最新の成果は阪本（後藤）純子2015を見よ。

26 Cf. CARDONA 1997：546, 針貝2015：27ff.

本(後藤)純子2015:86f)。当該 *Bhāṣya* における *dharma-* は、実質的には *sukṛtā-* 「良い行い [の効力]」等と同義であると考えられる。

*gav-* 「牛」に対して崩れた語形として挙げられているのは *gāvī* (Jaina *Māhārāṣṭrī*), *goṇī* (Ardha-Māghadī 及び Jaina *Mahārāṣṭrī*)<sup>27</sup>, *gotā* (Apabhraṃśa), *gopotalikā* (Apabhraṃśa) といった中期インド語である<sup>28</sup>。パタンジャリはこうした語は正しくない行い (*adharma-*) の結果として不利益をもたらし、あの世で疵つくことになるとして排除する。*Bhāṣya* の議論の中で、スラー酒を飲むことやバラモン殺しの大罪によって [地獄に] 落ちること<sup>29</sup>が例として挙げられているように、崩れた言葉の使用から発生する *adharma-* は実質的に *duṣkṛtā-* 「悪い行い」と同じ位置を占めている。

### 3.2.4. 前献供 (*Prāyaja*) のマントラに神格の格変化形を挿入するため

『マハーバーシャ』 vol. I, p.3, line 10ff.

*yājñikāḥ paṭhanti / prayājāḥ savibhaktikāḥ kārya iti / na cāntareṇa vyākaraṇaṃ prayājāḥ savibhaktikāḥ śakyāḥ kartum*

「祭式学者たちは説く:前献供 (*prayāja*) [のマントラ] はヴィバクティ (*vibhakti-*) を伴って発せられるべきである。だが文法学なしには、前献供 [のマントラ] はヴィバクティを伴って発することができない。」

*vibhakti-* 「分割」<sup>30</sup>は文法学では、「語尾」を意味する用語であるが、ここでは祭火再設置祭(祭火設置後に祭火設置者に災いが起こった時に、改めて祭火を設置するための祭式)などにおいて用いられる、*vibhakti* 「神格(アグニ)を分割すること」、つまり「*agni-* の格変化形をヤージヤー (*yājyā-* 献供直前に唱える詩節)に挿入すること」を意味する (KRICK 1982:520, fn.1413)<sup>31</sup>。祭火再

27 *gav-* に fem. *-nī-* をつけた形。*goṇa-* はこの形から作られた男性名詞 (CAILLAT 1960: 55-60 = Kl.Schr.39-44.)。

28 *gāv-* 「牛」の中期インド語形については PISCHEL 1981: 322f.

29 『チャーンドーギヤ・ウパニシャッド (ChU)』 V 10,9において四大罪に数えられる(阪本(後藤)純子2015:66)。*patita-* は「[自らが属する階級から]落ちた」とも考えられる(阪本(後藤)純子2015:fn.71)。

30 Cf. RENO 1942: 146f. = Kl.Schr. I 352f.

31 *Dīpikā* IV 6 (p.11): *yās tāvat prayājāśabdeṣu pratipadam vibhaktayo na tābhiḥ savibhaktikā ity ucyante, nityaṃ saṃnidhānāt tāsām / tasmād āmnātād anyac*

設置祭では、前献供 (prayāja)<sup>32</sup>の際に唱えるヤージヤーの中、4つに、また後献供 (anuyāja)<sup>33</sup>唱えるものの2つに vibhakti を挿入する。agni- の語で始まる、詩節 (fc-) 群<sup>34</sup>をヤージヤーの前に一つ一つ挿入する (BaudhŚrSū III 2)。或いはヤージヤー中の agne 「アグニよ」(voc.) の前に agni- の格変化した形を挿入して唱える。

E.g. 『アーシュヴァラーヤナ・シュラウタースートラ (ĀśvŚrSū II 8, 6)』

*samidho 'gne 'gna ājyasya vyantu / tanūnapād agnim agna ājyasya vetu / idō agnināgna ājyasya vyantu / barhir agnir agna ājyasya vetu*

「薪たちは、アグニよ、バターの跡をつけよ。タヌーナパートは、アグニよ、バターの跡をつけよ。滋養たちは、アグニよ、バターの跡をつけよ。敷き草は、アグニよ、バターの跡をつけよ。」

agne (voc.) の前に vibhakti が挿入された形 (agne 'gne 等) が独立し、agnir-agnir のような格変化形の重複がヤージヤーの前か後 (つまり ye yajāmahe の後、又は vausaṭ の発語の前) に追加されるようになった<sup>35</sup>：

『マナーヴァ・シュラウタースートラ (MānŚrSū V 1, 2, 6)』

*samidhaḥ-samidho 'gnā ājyasya vyantv agnir-agnis, tanūnapād agnā ājyasya vetv agnim-agnim, idō 'gnā ājyasya vyantv agner-agner, barhir agnā ājyasya vetv agner-agner*

---

*chabdarūpaṃ prayāṣeṣūpādīyate* 「先ず prayāja [のマントラ] の語において単語毎に生じている語尾 (vibhakti-)、それらが “vibhakti を伴った” と言われるのではない、それら (語尾) は常に [語基と] 一緒に置かれるから。それ故、[ここで vibhakti と呼ばれるものは語尾ではなく、] 伝承されているものとは異なる語形であり、prayāja のマントラで採用される」。

32 前献供のヤージヤーについては HILLEBRANDT 1897 : 94ff.

33 HILLEBRANDT 1897 : 134ff.

34 RV I 16,10, RV I 12,1, RV I 12,6, RV VI 16,34, RV V 13,2, RV VI 14,1. MS にはこれらの詩節は MS IV 10,1 : 149f. に収録されている。

35 KRICK 1982 : fn.1446. また AMANO 2009 : 269, fn.761は、この唱え方を MS I 7,3 : 112,4f. に対する2次的な解釈に基づく可能性を示唆する : ātha yād dvyākṣarāḥ satśś cāturakṣarāḥ kriyānte, ācaturāṃ hī paśāvo dvamdvām mithunāḥ 「次に、[vibhakti] は2音節からなっているが、4音節からなるものにされるのは、4つ目まで家畜たちは2つずつで番を成すから。

『マハーバーシャ』に対する現存最古の注釈、バルトリハリ『ディーピカー (Dīpikā)』は『アーシュヴァラーヤナ・シュラウタスートラ』と『アーパスタンバ・シュラウタスートラ』を引用しながら説明している。バルトリハリは vibhakti の使用に幾つか制限を設ける。vibhakti は 2 音節か 4 音節とならねばならず<sup>36</sup>、前献供のヤージヤーで一度用いた格変化形は使用してはならない<sup>37</sup>。

### 3.2.5. 神 (śabda) と一体になるため

『マハーバーシャ』 vol. I, p.3, line 15ff.

RV IV 58,3, cf. Nir. XIII 7	その者には、4つの角、3つの足がある。
catvāri śṛṅgā trāyo asya pādā	その者には、2つの頭、7つの手がある。
d <sub>u</sub> vé śīrṣe saptā hāstāso asya /	雄牛は、3重に縛られて、鳴きに鳴いている。
tridhā baddhō vṛṣabhō rorarvīti	偉大さの (又は偉大 mahā- な) 神が死すべ
mahō devō mātṛyām ā viveśa //	き者たちへと入り込んでいる。

catvāri śṛṅgāṇi catvāri padajātāni nāmākhyātopasarganipātās ca / trayo asya pādās trayah kālā bhūtabhaviṣyadvartamānāḥ / dve śīrṣe dvau śabdātmānau nityah kāryas ca / sapta hātāso asya saptavibhaktayah / tridhā baddhas triṣu sthāneṣu baddha urasi kaṇṭhe śirasīti / vṛṣabho varṣāt / rorarvīti śabdaṃ karoti / kuta etat / rautiḥ śabdakarmā / maho devo martyām āviveśeti / mahān devaḥ śabdaḥ / martyā maraṇadharmāṇo manuṣyāḥ / tān āviveśa / mahatā devena naḥ sāmyaṃ yathā syād ity adhyeyaṃ vyākaraṇam

「4つの角」とは、4つの語の種類 (品詞) であり、つまり名詞、定動詞、動詞前接辞、不変

36 vibhaktinām api sarvāsām prayoge prāpte yā dvyakṣarā vā satyaś caturakṣarā vā bhavantīti vacanād agnināgnineti na prayujyate 「全ての語尾の使用が想定されるとしても、“2音節である [vibhakti] か4音節のどちらかが用いられる”という陳述から、agnināgninā という vibhakti は用いられない」。この解釈は MS I 7,3 : 112,4f. に由来する可能性がある (→ fn. 35)。

37 tathā na śabdajāmi kuryāt / śabdajāmi hi tad bhavati yat pañcamyaṇtam / tasmād agner agner ity anena rūpeṇa ṣaṣṭhyantaṃ prayujyate / 「同じように同形反復 (śabda-jāmi-「語の兄弟、同形」) を為すべきではない。第5格 (abl.) 語尾で終わるもの、それは [gen. との] 同形反復となる。それ故、agner agneḥ というこの形については第6格 (gen.) 語尾で終わる語が使用されている [とみなされる]」。Cf. ŚB II 2,3,27, KRICK 1982 : 571f.

化辞である。「その者の3つの足たち」とは3つの時制、つまり過去、未来、現在である。「2つの頭」とは、2つの語の本質、つまり常住なものと作られるものである。「その者の7つの手たち」とは、7つの格語尾たちである。「3重に縛られている」とは、3つの調音点に縛りつけられていることである、つまり胸、喉、頭（口蓋<sup>38</sup>）に。*vṛṣabha-* は *vṛṣ* から (*varṣāt*) [作られた語である]。*roravīti* とは語を発する [ことである]。これは何故か。*rauti* は発語を行為対象とする [動詞]<sup>39</sup>だから。「偉大さの神が死すべき者たちに入ってきた」[について]。偉大な神とは発語である。「死すべき者たち」とは死を属性とする、人間たちである。「偉大な神」彼らへと入ってきた。[すると] 我々に偉大な神との一体性が生じるために [という目的で] 文法学は学ばれるべきである。

RV の詩節は「バターオイル (*ghṛta-*)」を歌ったものとされる。この詩節については異なる解釈が様々な文献に見られる。既存の答えではなく、整合性を持った答えがその都度求められたものと推測される（後藤1994：482, fn 6）。ヤースカ『ニルクタ』（*Nir. XIII 7*）は当該詩節の雄牛を祭式に例え、それに関するものに数を当てはめる。パタンジャリはこの詩節の数を文法上の諸概念と結びつけ、当該詩節は言葉を雄牛に例えて歌ったものという解釈を提示する。「偉大なものの神」とは詩節においてはソーマを喻えたものと解されるが、パタンジャリは発語 [機能] と解釈し、言葉を発する力を操るために文法学を学ぶ必要性を説く。

別の者たち (*apara āha*) は、上の詩節ではなく、RV I 164, 45 の詩節を引用し、文法学の学ぶことの意義を説明する：

38 = *mūrdhan-* 「[口腔の] 頂上」つまり反舌音を生む場所。Cf. Pāṇiniya-Śikṣā 13, ALLEN 1953 : 52f.

39 Cf. Pāṇ. I 4,52 *gati-buddhi-pratyavasānārtha-śabdakarmākarmakāṇām anikartā sa nau* [*karma* 49] 「進行, 知覚, 食べることを意味する [動詞が示す行為], 発語を行為対象とする [動詞が示す行為], 自動詞 [が示す行為] について使役形が示す行為の主体でないものは使役形が示す行為において行為対象となる。」



『マハーバーシャ』 vol. I, p.3, line 24ff.

RV I 164,45, cf. Nir. XIII 9	言葉は、完全に量られると、4つの足跡たちで
<i>catvāri vāk parimitā padāni</i>	ある。
<i>tāni vidur brāhmaṇā yé manīṣiṇaḥ /</i>	計画を持つバラモンたちはそれらを知っている。
<i>guhā trīṇi nihitā neṅgayanti</i>	[その4つの中] 3つ [の足跡] たちは見える
<i>turīyaṃ vāco manuṣyā vadanti //</i>	ことなく置き定められており、動かない。
	言葉の4分の1 [の pada] を人間たちは口にする。

*catvāri vāk parimitā padāni / catvāri padajātāni nāmākhyātopasarganipātās ca / tāni vidur brāhmaṇā ye manīṣiṇaḥ / manasa īṣiṇo manīṣiṇaḥ / guhā trīṇi nihitā neṅgayanti / guhāyāṃ trīṇi nihitāni neṅgayanti / na ceṣṭante / na nīṣantīty arthaḥ / turīyaṃ vāco manuṣyā vadanti / turīyaṃ ha vā etad vāco yaṃ manuṣyeṣu vartate / caturtham ity arthaḥ*

「言葉は、完全に量られると、4つの pada たちである」について。4つの語の種類 (品詞) であり、即ち名詞、動詞、動詞前接辞、不変化辞である。“計画を持つバラモンたちはそれらを知っている”について。*manīṣiṇaḥ* とは思考を動かす者たち<sup>40</sup>のことである。“見えることなく3つ置き定められて動かない”。つまり見えないところに3つは置かれて *na iṅgayanti*, つまり動かない、つまり瞬き [すら] しないという意味である。“言葉の4分の1 (= pada-) を人間たちは口にする”について。人間たちの中に存在する、これが言葉の4分の1なのだ。[*turīyaṃ* とは pada の] 4分の1である

詩節では人間が話す言葉は言葉全体の4分の1であると言われている。見えな  
いところにある、残りの4分の3については、既にブラーフマナの時代から様々  
な見解があり (cf. GELDNER 1951 : 236), Nir. XIII 9 (Pariśiṣṭa) にも諸説が挙  
げられている。GELDNER は神々の言葉と解釈する。また4分割は巨人解体の

40 Cf. THIEME 1967 : 99ff. = Kl.Schr. I 239ff. ナーゲーシャは, *īṣin-* に *īś aiśvarya-* (DhP II 10) 或いは *īś gati-himsā-darśaneṣu* (DhP I 642) からの派生を想定している : *Uddyota cittaśuddhikrameṇa vaśīkartāro, viśayāntarebhyo vyāvṛtīyā himsākā vā* 「意識を清らかにする過程で、望みのままにする者たち (< DhP II 10 *īś* 「支配者たる (*aiśvarya-*)」), 或いは他の感官の諸対象から [意識を] 逸らすことによって [他のものを] 傷つける (= 他のを傷つけるほどに意識を集中する) 者たち (< DhP I 642 *īś* 「傷つける (*himsā-*)」 (cf. THIEME 1967 : 101 = Kl.Schr. I 242, fn. 11)。だが, *manīṣā-* を *īś* から直接導き出すことは難しく, *īś* からの派生を除外する理由はない。尚, Nir. II 25 ; IX 10は *manasa īśā-* 「思考の轅」と解釈する。

歌 (Puruṣa-Sūkta, RV X 90) の中の、4分割された巨人 (*puruṣa-*) の中、4分の1は地上にあり、残りが天にあるという詩節 (RV X 90, 3) を想起させる。

この詩節を挙げる意図は Bhāṣya では明言されていない<sup>41</sup>。JOSHI-ROODBERGEN 1986 : 57, fn.178a は *apara āha* 「別の者たちは言っている」以下を付加と推測する。RV IV 58, 3と RV I 164, 45は Nir. XIII (Pariśiṣṭa) にも引用されており、恐らく Nir. XIII 9の解説を念頭に置いたものと思われる。

### 3. 2. 6. 言葉の理解は正しい言葉を知る者のみに開かれているから

『マハーバーシャ』 vol. I, p.4, line 2ff.

RV X 71,4, cf. Nir. I 19

*utā tvaḥ paśyan ná dadarśa vācam*  
*utā tvaḥ śṛṇvān ná śṛṇoty enām /*  
*utó tvasmai tanúvām ví sasre*  
*jāyēva pātya uśātī suvāsāḥ //*

そして、ある者は見えていても、言葉が見えなかった。そして、ある者は聞いていても、言葉が聞こえなかった。

そしてまた、[言葉 (*vāc*) は] ある者に対して [自分の] 体を広げた、

妻が良い服をまとい、[夫を] 欲して、夫に対して [広げている] ように。

*api khalv ekaḥ paśyann api na paśyati vācam / api khalv ekaḥ śṛṇvann api na ekaḥ śṛṇoty enām / avidvāmsam āhārdham / uto tvasmai tanvām visasre / tanuṃ vivṛṇute / jāyeva patya uśātī suvāsāḥ / tad yathā jāyā patye kāmaya mānā suvāsāḥ svam ātmānam vivṛṇuta evaṃ vāg vāgvide svātmānam vivṛṇute / / vān no vivṛṇuyād ātmānam ity adhyeyaṃ vyākaraṇam*

「ある人は見ながらも、言葉が見えもしないし、ある人は聞きながらも聞こえもしない。[詩節の] 半分は無知な者 [のこと] を言っている。“そしてまた、ある人に対しては [自分の] 体を広げている”。[つまり] 体を開いている。“妻が良い服を着て、欲して夫に対して [広げている] ように”、即ち妻が夫を欲して良い服を着て自分自身を広げているのと同じように言葉は言葉を知る者に自分自身を開いている。言葉が我々に自己を開いてほしいと [いう目的で] 文法学が学ばれるべきである。」

41 ナーゲーシャは「それ故、全ての pada を理解するために、又は *manīṣin-* となるために、文法学が学ばれるべきである」という意図を補う。

RV X 71 「理解 (jñāna-) の歌」が引用されている。「理解」とは即ち言葉による理解である。この歌をもってパタンジャリは文法学を学んだ者のみが言葉を正しく理解できることを説明している。

### 3. 2. 7. 〈正しい〉言葉を話すことは仲間であることを示すものだから

『マハーバーシャ』 vol. I, p.4, line 10ff.

RV X 71,2, cf. Nir. IV 10

<i>sāktum iva tītaiṇā punānto</i>	大麦の粗挽き粉を篩によって清めているかの
<i>yātra dhīrā mānasā vācam ākrata /</i>	ように、思慮ある者たちが思考によって言葉
<i>ātrā sakhāyaḥ sakhyāni jānate</i>	を形作った時 <sup>42</sup> ,
<i>bhadraīṣāṃ lakṣmīr nihitādhi vāci //</i>	この時、同僚たちは仲間であることを認識し
	合う、それら（仲間であるということ）のめ
	でたい印は言葉の上に置き定められている。

*saktuḥ sacater durdhāvo bhavati / kasater vā viparītād vikasito bhavati / titaiḥ  
paripavanaṃ bhavati tatavad vā tunnavad vā / dhīrā dhyānavanto manasā  
prajñānena vācam akrata vācam akṣata / atrā sakhāyaḥ sakhyāni jānate /  
sāyujyāni jānate / kva / ya eṣa durgo mārga ekagamyo vāgviśayaḥ / ke punas te  
vaiyākaraṇāḥ / kuta etat / bhadraīṣāṃ lakṣmīr nihitādhi vāci / eṣāṃ vāci bhadrā  
lakṣmīr nihitā bhavati / lakṣmīr lakṣaṇād bhāsanāt parivṛdhā bhavati*

「saktu- は sacati から、ふるい落としがたい (durdhāva-) もの [を意味して] 生じる。あるいは音位転換して kasati から、開いたもの [を意味して] 生じる。titaiḥ- とは篩であり、広げられたものを持つものか或いは穿たれたものを持つものが用いられる。dhīrāḥ つまり思慮を持つ者たちが manasā つまり洞察力をもって言葉を akrata つまり発した。sakhyāni つまり一つに結びつくこと（連帯）たちを人々は認識する。どこで？進みがたい道であり、たった一つ [の方法] によって進まれる（理解される）、言語の領域（次元）[において]。だがどういう人々か？文法学者たちが。これは何故なのか？bhadraīṣāṃ lakṣmīr nihitādhi vāci つまり、この者たちの言葉の上にめでたい印が置き定められているから。lakṣmī は「輝く (bhāsana-)」[を意味する] lakṣ から [派生したものであり、] 強

42 Wz.Aor. ākrata は主文の行為 (Ind.Präs.) に先行することを表していると解される。Cf. HOFFMANN 1967 : 157.

いもの<sup>43</sup>となる。」

前半の語釈はニルクタ Nir IV 10に基づいている。後半では、言語に関して文法学者たちが共通理解、又は意思疎通を得ることができるのは彼らの用いる言語に幸運の印 (*bhadrā lakṣmī*) が宿っているからだと説明する。パタンジャリは *lakṣmī-* を *parivṛdha-* Adj. 「強固なもの」と説明する。カイヤタは究極の實在 (*paramārtha-*)、つまり Brahman を知るための特徴と説明する<sup>44</sup>。また Ratprakāśa 註では、言葉の女神 (*sarasvatī*) と解釈されている<sup>45</sup>。いずれの解釈も、バラモンたちの言葉に宿る力を象徴するものと考えている。

また、この詩節に言われる節の喩えを用いて、文法学によって誤った語が取り除かれて正しい言葉が作られることを示唆する意図があったことも考えられる<sup>46</sup>。

### 3. 2. 8. 真実の神となるため (THIEME 1964 : 168-173= Kl.Schr. I 620-625)

『マハーバーシャ』 vol. I, p.4, line 26ff.

RV VIII 69,12, cf. Nir. V27

<i>sudevō asi varuṇa</i>	ヴァルナよ、君は良い神だ、
<i>yāsya te sapta sīndhavaḥ /</i>	7つの河たちがそういう君の
<i>anukṣāraṇti kākūdāṃ</i>	君の喉 ( <i>kākūd-</i> ) へと流れ込む、
<i>sūrmīṃ suśīrām iva /</i>	良い流れの (よく流れる=空の) 管 ( <i>sūrmī-</i> )
	へと [流れるように]。

43 Cf. *pari-bṛdhā-* 「確固たる、強固な」 (< *pari-√barh* 「周りに何かを敷き詰めて固定する」), cf. EWAia II, p.212. 或いは、ここでは「卓越した、支配的な」の意味とも解し得る。Cf. *parivṛdha-* m. 「支配者」 (Pāṇ. VII 2,21), Nir. I 7 on RV II 11,21 *bṛhad iti mahato nāmadheyam / parivṛdho bhavati* 「*bṛhat* とは、大きなものを名づけたものである。つまり *parivṛdha-* なものとなる」。

44 Prāṇīpa : *vedākhya brahmaṇi yā lakṣmī vedāntesu paramārthasamvillakṣaṇoktā saīṣām nihitety aratāḥ* 「ヴェーダと呼ばれるブラフマンの上に、諸々のウパニシャッドの中で究極の實在 (= Brahman) に気づく (又は「[真相を] 知る (Mitwissen) 」?) という特徴を持つと言われる *lakṣmī*, それがこの者たちのものとして置き定められているという意味である」

45 Cf. FILIOZAT 1975 : 61, fn.1.

46 Dīpikā IV 10 *evam apaśabdāḥ śaktyā vyākaraṇena śodhyante* 「同じように正しくない語たちは、[語の] 表示力を通じて、文法学によって落とし清められる」

*sudevo asi varuna satyadevo 'si yasya te sapta sindhavaḥ sapta vibhaktayaḥ /  
 anukṣaranti kākudam / kākudam tālu / kākur jihvā sāsmin nudyata iti kākudam /  
 sūrmyaṃ suśirām iva / tad yathā śobhanām ūrmim suśirām agnir antaḥ praviśya  
 dahaty evaṃ tava sapta sindhavaḥ sapta vibhaktayaḥ tālv anukṣaranti / tenāsi  
 satyadevaḥ / satyadevāḥ syāmety adhyeyaṃ vyākaraṇam*

「*sudevo asi varuṇa* つまり君は真実の神である。*yasya te sapta sindhavaḥ*, つまり7つの各語尾が。*anukṣaranti kākudam. kākudam* つまり口蓋へと。*kāku-* つまり舌であり、それがこれ(口蓋)へと押し動かされるとというのが *kākuda-* [の意味] である<sup>47</sup>。*sūrmyaṃ suśirām iva*, いわば、あたかも火が、空洞のある美しいうねり<sup>48</sup>の中へと入って焼くように、同じように君の口蓋へと *sapta sindhavaḥ* つまり7つの格語尾たちは流れる。それ故、君は真実の神である。我々は真実の神(又は真実の神を持つ者、真実の神にあやかる者)<sup>49</sup>になりたい [ので]、文法学は学ばれるべきである。」

ボタンジャリは7つの河たちを7つの格語尾と結びつける。7つの語尾とは即ち、語尾を伴う言葉全体を意味するものと考えられる。そして7つの語尾、つまり言葉を火に例え、*sūrmī-* を *śobhanām ūrmim suśirām* 「空洞のある美しいうねり [の中] へ」と語釈する。この表現の意図するところはわからない<sup>50</sup>。RV VII 1,3では炎のうねり、火柱が *sūrmī-* と呼ばれ、また後の文献では「金属の像」の意味で用いられる (cf. Amara-Kośa II 10,35)。ナーゲーシャも火が金属の像 (*ayaḥpratimā-*) の中へと入る様子を表現していると理解する<sup>51</sup>。

47 Nir. V 26の解釈に由来する。

48 Nir. V 27は *kalyāṇormi-* 「めでたい波」と語釈する。

49 THIE1964:169f.= Kl.Schr. I 621f. によれば、*satyadevāḥ* 「真実を神として [崇める]」(Bv.)。だが、ここではカイヤタが理解するように、*tatpuruṣa* の可能性も排除できない: *Pradīpa yato hetor vyākaraṇajñānād varuṇaḥ satyadevas, tato hetor anye 'pi satyadevā bhavanti* 「文法学の知識があるからヴァルナは *satyadeva-* であるという理由、まさにその理由から、別の者たちも *satyadeva-* となる」。

50 THIE1964:171 = Kl.Schr. I 623) の解釈によれば、火が水の中であって水を沸騰させることを表現している。

51 Uddyota: *sacchidrām praviśyāgnir yathā tatratyaṃ malaṃ bhasmīkṛtya pratimāṃ śuddhām karoti evaṃ tāludese prakāśaṃ prāpya vibhaktayo vibhaktiyantāḥ śabdāḥ śārīraṃ pāpam apākurvantīty arthaḥ* 「穴を伴う [像] へと入って、火はそこにある汚れを灰にして、像を清らかなものするように、同じように喉の場所において光を手に入れ、語尾たち、つまり語尾で終わる語たちは身体中の悪いものを取り除く、と

言葉は *satyadeva*-「真実の神」ヴァルナの喉へと流れ込むと説明する。ここで言われている「真実 (*satya*-)」とは言葉として発したことが真実になることである。ヴァルナは天理を監督し、水を支配し、契約の遵守を監視する。つまり宣言したことを履行させる強制力を持ち、虚偽を口にする者に水腫病をもたらすと考えられていた<sup>52</sup>。パタンジャリは、文法学を修めると口にしたことを実現する力を持つ神にあやかると説く。

### 3. 3. 文法学学習の目的を説く理由

『マハーバーシャ』 vol.I, p.5, line 5ff.

【問】

*kiṃ punar idaṃ vyākaraṇam evādhijigāṃsamānebhyaḥ prayojanam anvākyāyate na punar anyad api kiṃ cit / om ity uktvā vṛttāntaśaḥ śam ity evamādīṇ śabdān paṭhanti*

「それにしても、何故、文法学を学ぼうとする人々には目的が解説されるが、だが他のことと[を学ぼうとする人々には]何ら[目的が解説され]ないのか。[人々はただ] *om* といってから、事ある毎に *śam* などの語を唱える」。

【答】

*purākalpa etad āsīt / saṃskārotarakālaṃ brāhmaṇā vyākaraṇam smādhīyate / tebhyaḥ tatra sthānakaraṇānupradānājñebhyo vaidikāḥ śabdā upadiśyante / tad adyatve na tathā. vedam adhīya tvaritā vaktāro bhavanti / vedān no vaidikāḥ śabdāḥ siddhā lokāc ca laukikāḥ / anarthakaṃ vyākaraṇam iti / tebhya evaṃ vipratipannabuddhibhyo 'dhyetṛbhya ācārya idaṃ śāstram anvācaṣṭe / imāni prayojanāny adhyeyam vyākaraṇam iti*

「昔の時代はこうだった：入門式の後の時期に文法学はバラモンによって学ばれたものだ。

そこで、調音場所、調音器官、付随的素性（有声・無声など）<sup>53</sup>を理解する、そういう人々

という意味である」。

52 例えば『アタルヴァヴェーダ』I 10（水腫病を治す呪文）や「シュナハシェーパの物語」（*Aitareya-Brāhmaṇa* VII 13-18, *Śāṅkhāyana-Śrautasūtra* XV 17-27）の中でハリシュチャンドラ（*Hariścandra*）王がヴァルナとの約束を果たさなかったため水腫病にかかるという話など。

53 Cf. ALLEN 1953 : 22f. 本来は *Prātiśākhya* の用語。カイヤタ註によれば（口腔）外的調音（*bāhyaprayatna*-）に対応する。

にヴェーダの語は教えられた。それが今日ではそうではなく、ヴェーダを学ぶと、急ぎ立てられて言う者となる、“[「ヴェーダに基づいて、ヴェーダの語は我々にとって確立しており、世間の語は世間に基づいて [確立している]。文法学は無意味である”と。そういう異なる見解を持って学ぶ人々に対して先生はこの学問を解説する、“こうしたことが目的であり、[だから] 文法学が学ばねばならない”と [言って]]。

最後の Bhāṣya では、文法学の目的を説く理由が述べられている。元々はヴェーダの学習に付随して、又はヴェーダ学習に入る前に文法学が学ばなければならなかったようである。文法学が対象とするのは、ヴェーダの言葉 (*vaidikaśabda*-) と世間の言葉 (*laukikaśabda*-) である。だがヴェーダの言葉はヴェーダの学習を通じて学ばれ、世間の言葉は、日常の使用から身に着けるのだとすれば、文法学の学習が何をもちたすのかという疑問が呈されるように、当時、文法学の意義はもはや自明のものではなくなり、重要性も幾分低下していたことが窺える。

#### 4. まとめ

正しい言葉を用い、祭式を通じて世界を動かす、祭官の職業を成り立たせているのは、言葉を操る力である。このような事情から文法学をはじめとする諸学が成立することとなった。文法学が独立した地位を獲得すると、教養人が話すべき言葉の護持が文法学の主たる目的となった。当然背景には中期インド諸語の台頭がある。それらを崩れた言葉 (*apabhraṃśa*-) として徹底的に排斥した。また、こうした事情と並んで、パタンジャリの時代にはヴェーダ学習における文法学の役割が相対的に低下したことが推測される。そこで文法学 (者) の存在意義を確立するために、パタンジャリは、祭式行為に必要なマントラの唱え方などを挙げながら、文法学が祭官を養成する上で、不可欠であることを示そうとした。

文法学がヴェーダの伝統を受け継ぐものであるという、いわば「権威づけ」として、議論の後半では『リグヴェーダ (RV)』が集中的に引用されている。パタンジャリがヤースカ『ニルクタ』の解説を念頭に置いていることは注目に値する。RV の語句について、語形の分析は『ニルクタ』に従っているが、内容については、パタンジャリが文法学に関連付けて解釈し、言葉を操る力を強

調する。特に文法学を学ぶ目的の最後に、実現力を持つ神 (*satyadeva*-), ヴァルナ  
の詩節を引用し、口にしたことを実現する力を得ることを挙げていることは興味深い。  
これこそが文法学を学ぶ真の目的であると説いているようにさえ思える。パタンジャリ  
のヴェーダの解釈自体は文法学に関連付けた独自のものであるが、彼自身の考  
えの中にアーリヤ人古来の言語観を見て取ることができる。

#### 一次文献略号表 (二次文献の略号は二次文献一覧に記載)

ĀpŚS: Āpastamba-Śrauta-Sūtra	Nir.: Nirukta
ĀśvŚS: Āśvalāyana-Śrauta-Sūtra	MānŚrSū: Mānava-Śrauta-Sūtra
AV: Atharvaveda-Saṁhitā	MS: Maitrāyaṇī Saṁhitā
BaudhDhS: Baudhāyana-Dharma-Sūtra	Pat.: Patañjali (Mahābhāṣya)
BaudhŚrSū: Baudhāyana-Śrauta-Sūtra	RV: Ṛgveda-Saṁhitā
ChU: Chāndogya-Upaniṣad	ŚB: Śatapatha-Brāhmaṇa
DhP: Dhātupāṭha	ŚBM: Śatapatha-Brāhmaṇa (Mādhyandina)
DhS: Dharma-Sūtra	ŚBK: Śatapatha-Brāhmaṇa (Kāṇva)
JB: Jaiminīya-Brāhmaṇa	ŚāṅkhŚrSū: Śāṅkhāyana-Śrauta-Sūtra
KS: Katha-Saṁhitā	Vārt.: Vārttika

#### 二次文献

ALLEN, William Sydney

1953 *Phonetics in ancient India*. London.

AMANO, Kyoko

2009 *Maitrāyaṇī Saṁhitā I-II. Übersetzung der Prosapartien mit Kommentar zur Lexik und Syntax der älteren vedischen Prosa*. Bremen.

BÖHTLINGK, Otto & ROTH, Rudolph

1855-1875 *Sanskrit-Wörterbuch*. 7 Bde. St.Petersburg.

BRUCKER, Egon

1980 *Die spätvedische Kulturepoche nach den Quellen der Śrauta-, Gṛhta- und Dharmasūtras. Der Siedlungsraum*. Wiesbaden.

CAILLAT, Colette



- 1960 “Deux études de moyen-indien” *Journal Asiatique* 248, pp.41–64 =  
*Selected Papers*. pp.25–48. Pāli Text Society, Bristoll 2011.

CARDONA, Goerge

- 1997 *Pāṇini: his work and tradition*. Volume 1: Background and Introduction.  
Delhi.

EWAia → MAYHOFER, Manfred

FILLIOZAT, Pierre

- 1975 *Le Mahābhāṣya de Patañjali avec le Pradīpa de Kaiyaṭa et l'Uddyota de Nangeśa. Adhyāya 1 Pāda 1 Āhnika 1-4*. Institut Français d'Indologie  
Pondichéry.

GELDNER, Karl Friedrich

- 1951 *Der Rig-Veda. Aus dem Sanskrit ins Deutsche übersetzt und mit einem  
laufenden Kommentar versehen*. 3Bde. Cambridge, Mass. (Harvard  
Oriental Series 33, 34, 35) .

GOTŌ, Toshifumi (後藤 敏文)

- 1987 *Die "I.Präsensklasse" im Vedischen. Untersuchung der vollstufigen  
thematischen Wurzelpräsentia*. Wien.

- 1994 「Veda 祭式の brahmodya と Saṃyutta-Nikāya I 1,2,3」『印度学仏教学研究』第43巻第1号.

- 2003 「古典的インド学」『古典学の再構築』平成10–14年文部科学省科学研究費補助金 特定領域研究 (A) 118「古典学の再構築」研究成果報告集 I, 総括班報告. 神戸.

- 2008 「古代インドの祭式概観—形式・構成・原理—」『総合人間学叢書』  
vol.3, pp.55–102. 東京外語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

HARIKAI, Kunio (針貝 邦生)

- 2015 「マハーバーシュヤ第一日課とタントラヴァールティカ」『比較論理学  
研究』第12号, pp.21–37.

HILLEBRANDT, Alfred

- 1897 *Das altindische Neu- und Vollmondsopfer in seiner einfachsten Form mit  
Benutzung handschriftlicher Quelle dargestellt*. Jena.

HOFFMANN, Karl

1967 *Der Injunktiv im Veda*. Heidelberg.

JOSHI, S.D. / ROODBERGEN, J.A.F.

1986 *Patañjali's Vyākaraṇa-Mahābhāṣya Paspasāhnikā. Introduction, Text, Translation and Notes*. Pune.

KOBAYASHI, Masato

2006 "Pāṇini's Phonological Rules and Vedic: Aṣṭādhyāyī 8.2" *Journal of Indological Studies* 18, p.1-21.

KRICK, Hertha

1982 *Das Ritual der Feuergründung*. Wien.

MAYRHOFER, Manfred

1992—1996 *Etymologisches Wörterbuch des Altindischen*. 2 Bde. Heidelberg.

OZONO, Junichi

2010 (2011) "Das Vedische bei Pāṇini" *Studien zur Indologie und Iranistik (StII)*, Bd.27, S.237-256.

PISCHEL, Richard

1981 *A Grammar of the Prākṛit Languages*. Translated by Subhadra Jhā. Reprint (1999). Delhi.

PW → BÖHTLINGK, Otto & ROTH, Rudolph

RENOU, Luis

1941-1942 "Les connexions entre le rituel et la grammaire" *Journal Asiatique* 233 = Luis Renou. *Choix d'études indiennes*. Tome I. Paris.

SAKAMOTO-GOTÔ, Junko (阪本 (後藤) 純子)

2005 "Pāli *thīṇa-middha-*, amg. *thīṇa-giddhi-/thīṇaddhi-* und ved. *mardh/mṛdh*" *INDOGERMANICA. Festschrift Gert Klingenschmitt. Indische, iranische und indogermanische Studien dem verehrten Jubilar dargebracht zu seinem fünfundsechzigsten Geburtstag. Herausgegeben von Günter Schweiger. Taimering*.

2015 「生命エネルギー循環の思想－「輪廻と業」理論の起源と形成」  
RINDAS 伝統思想シリーズ24. 龍谷大学現代インド研究センター.

SCHARFE, Hartmut

- 1976 “A Second “Index Fossil” of Sanskrit Grammarians ” *Journarl of the American Oriental Society (JAOS)* . vol 96, no.2, pp.274—277.
- 1977 *Grammatical Literature. A History of Indian Literature* (ed. by J.Gonda) , vol. V, Fasc.2. Wiesbaden

THIEME, Paul

- 1935 *Pāṇini and the Veda. Studies in the early history of linguistic science in India*. Allahabad.
- 1964 “Patañjali über und die sieben Ströme” *Indo-Iranica. Mélanges présentés à Georg Morgenstirne à l' occasion de son soixante-dixième anniversaire*. pp.168–173 Wiesbaden. = *Kleine Schriften I, Teil 2* (1971) . pp.620–625. Wiesbande.
- 1967 “Vedisch *manīṣā*” *Beiträge zur Indogermanistik und Keltologie Julius Pokorny zum 80. Geburtstag gewidmet. Herausgegeben von Wolfgang Meid*. Innsbruck. = *Kleine Schriften I, Teil 1* (1971) , pp. 239–246. Wieabnden.

TSUJI, Naoshiro (辻 直四郎)

- 1978 『古代インドの説話—ブラーフマナ文献より—』 春秋社.

## Die richtige Sprache (*śabda*-) : Aus dem Blickwinkel vom Veda und der pāṇineischen Grammatik

Junichi OZONO

Der vorliegende Beitrag beruht auf einem auf 56. Tagung der Gesellschaft *Indogaku-Shūkyō-Gakkai* gehaltenen Themenvortrag “Sprache und Sprechlaut in Religionen (*Shūkyō ni okeru Kotoba-Onsei*)” .

Das vedische Ritual ist eine Operation, die der kosmischen Regel (*ṛtá*-) gemäß mit *bráhman*- m. ‘Worte, die die Verwirklichungskraft besitzen’, Götter, Natur u.a. in Bewegung setzt. Dabei spielen mündlich richtig geäußerte Worte (*śabda*-) eine wesentliche Rolle. Falsch ausgesprochene Worte verfehlen ihre Wirkung, wie sich in den bekannten vedischen Mythen (*Śatapatha-Brāhmaṇa* I 6,3,10; III 2,1,24), die in *Mahābhāṣya* von dem Grammatiker Patañjali zitiert sind, erzählt.

Die indische einheimische Grammatik, die von Pāṇini (ca. 380 v.Chr.) begründet wurde, hat unter anderem den Zweck, die richtige Sprache (d.h. Sanskrit), die von Gelehrten (*śiṣṭa*-) gesprochen werden muss, zu lehren. Patañjali, ein Nachfolger von Pāṇini, erklärt in der Einführung (*Paspaśāhnika*) von seinem *Mahābhāṣya*, warum Gelehrten die Grammatik (*vyākaraṇa*-) lernen müssen. Aus dem von ihm geführten Diskussion lässt sich ersehen, dass er sich bemühen musste, das Sanskrit zu bewahren, und auch Einwirkungen der mittelindischen Sprachen aus dem Sanskrit auszuschließen.

Verse des Rigveda zieht er offenbar für die Behauptung der Überlegenheit der pāṇineischen Grammatik heran. Seine Deutungen der vedischen Texte weichen zwar von modernen philologischen Auffassungen ab, in seinem Gedanke an sich aber spiegelt sich die herkömmliche Ansicht über die Sprache von ārischen Volksstämmen wieder.